



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 農業経営学における主体形成論の展開：重富真一氏の論文を中心に                                                    |
| Author(s)        | 須藤，茂樹                                                                             |
| Citation         | 農業経営研究，23，119-127                                                                 |
| Issue Date       | 1997-02                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/36524">https://hdl.handle.net/2115/36524</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 23_119-127.pdf                                                                    |



# 農業経営学における主体形成論の展開

— 重富真一氏の論文を中心に —

須藤 茂樹

1. はじめに
2. 論文の概要
  - 1) 農業経営者能力形成過程に関する一考察
  - 2) 農業における主体形成論の系譜
  - 3) 農民意識と経営管理能力育成
3. おわりに — 今後求められる方向性 —

## 1. はじめに

主体形成論は、ある人間類型に至る、ある機能を果しうる人間に至る理論を提供するものである。近年の日本における厳しい農業経営環境において、主体形成論はいかなる視角を提示しているのかを知るために、今回、重富真一氏が1983年～1985年に書かれた2論文・1研究ノートを要約し、今後求められる研究の方向性を把握したい。

## 2. 論文の概要

### 1) 農業経営者能力形成過程に関する一考察

本稿で著者は、個別経営主体を対象とし、経営主体がいかなる経過を経てその経営管理認識を発生させてきているのかを、主体をとりまく構造と共に考察を行った。

#### 方法

(1) 重富は主体形成の局面において、現在までの農業経営学の中での主体の位置づけを明らかにし、主体の立場のとらえ方として、主体を以下のように分類した。

I) 主体を単に与えられた課題の実行者とみなす立場

個々の主体の行為・意識も社会的な層としてのそれに解消されており「主体」といった独自の問題領域自体は存在していないとした。

i) 伝統的農業経営経済学 経営要素の結合形態から、経営目標、経営管理手法が規定され、主体はその規定どおりに行為するものとみなした。

ii) 生産力論的農業経営学 生産力の担い手として生産力概念をそのまま個別レベルにまでもちこんだもの。

II) 社会経済的条件に規定されつつも、意識や能力を積極的に取り上げる立場

生産力を中心とする社会経済的条件から一方的に主体の意識・能力を規定しようとするため、主体形成自体も客体の変化から一方的に規定され、しかも層としての把握に留まらざるをえないとした。

i) 農民層分解論の研究者

ii) 北海道大学社会教育グループ “学習運動” という形で主体の側からの働きかけが述べられる。ただし学習課題の揭示にとどまり、経営主体としての行為も社会的役割の中でしか位置づけられなかった。

III) 主体を経営発展の契機として重視し、主体の独自性を扱おうとする立場  
主体の働きかけの重要性を指摘したが、主体の側の発展（形成）をもたらす作用は論じられていないとした。

i) 金沢夏樹

ii) 高橋正郎 文化構造という経営活動の外にある要因を重視

iii) 松木洋一 労働力編成という経営行為の中に主体形成の場を求めたが、生産組織における主体形成へのインパクトが示されるのみでそのメカニズムとプロセスは明らかでないとした。

ここで重富は、個々の主体の側からの働きかけのプロセスを知ること重点をおくべきととらえ、経営管理の局面において主体形成を見ていくとした。

(2) 3人の論者をあげ、経営者能力はいままでどのような捉え方をされたかを述べている。

I) 天間征(1969) 経営者能力の要素を列挙した。要素相互の関係、農業経営者の特殊性、現実の活動との関わり方、能力の形成過程などが不明。

II) 田口三樹夫(1980) 企業的経営へ発展していく経路の違いを類型化、理念に表される経営主体の能力の違いの存在を示すことを試みる。発展経路の違いをもたらした主体的条件は明らかにするが、発展自体をもたらす条件、その形成過程は不明のまま。

III) 稲本志良(1971) 経営者能力を問題解決能力と定義し、能力を支える知識と経験が実際の経営活動の中で蓄積され、経営発展の要因となっていることを示

すことにより、能力形成のプロセスとメカニズムを明らかにした。

ここで重富は稲本と同じ経営者能力の定義を用い、経営主体が経験や知識を経営発展の原動力となるように蓄積し得た理由を問題にするとした。

(3) 能力形成メカニズム把握の視座を述べた。

発達心理学者ピアジェの論を用い、問題解決の過程がどのような能力形成のメカニズムを有しているのかを示した。その論は以下のとおり。

問題解決の仕方には、主体の受け止め方の構造（シェマ）を変えずに解決できるものと、シェマを変え、自己の能力を向上させて、初めて解決できるものの二つの分けられること。後者の場合、主体の側に課題を受け止め、解決していこうとするだけの成熟（準備性）が必要となること。

(4) 能力形成プロセス把握の視座を述べた。

「経験の蓄積」のみではとらえられない経営者能力のプロセスの把握のため、後藤(1971)を用い、二種類に分類し、農業においてはii)を経営発展の関わりが深いとして中心に論じる。

i)プログラム化された意思決定

稲の状態を見ての施肥の判断など、課題に対してその解決の手順が前もって定められている場合における意思決定を指す。

ii)プログラム化されない意思決定

非日常的な、経営戦略とも関わる意思決定を指す。

そして、ii)の意思決定においては、広領域で的確な問題の把握が能力形成の指標になると、大河内(1979)の、“経営構想の射程”，すなわち時間的射程，空間的射程，射程の幅，射程の精度の四指標を用いて経営構想力を捉える手法を用い、広く深く関連領域を視野に入れた問題解決を行うようになるプロセスを捉える指標とした。

(5) 調査結果

農業主体の営農上の関心事が、二十代は基礎技術修得に、三十代は経済目標・より高度な技術修得などであったことから、重富は農業主体が年齢を経るにつれて基礎技術修得から他の経営管理領域に課題認識が移るととらえ、ピアジェの論にあてはめ、経営内の地位変化を第1インパクト，社会経済的条件や経営構造の変化を第2インパクトとして、第1インパクトによる認識発生（シェマの変化），および基礎技術の修得が、第2インパクトを作用させる準備性となるとした。

また、技術面・経済面における、経営構想の射程の広狭を分類し、経営成果と射程の相関を求めたが、一義的な結論は得られなかった。

そこで、高収益を実現している、射程が広い経営主・狭い経営主に対して聞き取り調査を行い、その結果、前者は他産業並みの労働投下を目指し、省力設備の

導入を試み、その後、省力設備の為の借入金返済・子供の養育費の発生・オイルショック等もあり、効率の良い経営管理で所得増加をめざす必要性を感じ、詳細な記帳や共撰加入を行うなど、経営管理シエマを大幅に変更し、一方、後者は技術力向上を目指し、収量増加と多労働投下により経営管理シエマを変えることなく現在に至ったことと解釈した。

(6) まとめと教育実践の際の指摘を行った。

経営主体が問題に直面し、かつそれを自己の能力課題として受けとめうる”準備性”があるときに「射程」の拡大は起こり、しかも”準備性”として、基礎技術の修得、経営権の獲得、労働投下、数値にも関わる必要があることを示した。

教育主体の側は、経営主体にどのような”準備性”が整っており、いかなる課題揭示が必要かつ適切かということを念頭においた実践を行わなければならないとし、このような主体の把握によって層としての把握に進むことがよいとしている。

また、本稿の選んだ調査対象の限定性、経営指標の不完全性にも触れた。

## 2) 農業における主体形成論の系譜

本稿において重富は主体形成のメカニズムに関する理論の検討を行い、かつそれを通して理論に含意されている人間像に触れることを目的とした。

### 方法

重富は各々の視角の相違を明確にし、規定にあるものを把握し、違いの生じた人間観にまで掘り下げることを通して、主体形成メカニズムを理論的に把握するために求められる視角を検討した。

(1) 労働の社会化論を基礎におく視角 生産過程の変化による労働者自身の変容の過程を明らかにしようとするもので、個よりも層としての農民を対象にし、経済外的条件よりも経済的条件を視座においた立場をとるものとし、重富は以下の人物をとりあげた。

i)北海道大学社会教育研究室のグループ(美土路達雄, 山田定一等)

機械化, 生産組織化の進行により経営管理能力等を発達させる方向と, 質的労働内容の低下, 技能の奪取, 労働時間の延長, 緊張度の増加, 病気, 障害の発生をもたらず発達を阻害させる方向, この二方向から発達を選び出すための農民の学習運動や, 教育関連機関の役割についての注目を試みた。しかし, 重富はこれらの実践が起こりうる理論的根拠が示されていないとした。

ii)松木洋一

生産組織化は高い管理・運営能力を要求すると同時に, 農民の間に管理・被管理関係を作り出すため, 管理・被管理関係が固定しないような, 話し合い, 持ち

回り、学習といった実践的課題を掲示した。しかし、重富は経営管理の理論的な解明がなされていないとする。

iii)大泉一貫

生産の組織化がなされている地域（すなわち労働の社会化がなされている地域）で、困難に対して地域農業の発展に結びつけるような対応を行いうる生産の組織化の条件を掲示した。しかし、重富は生産の組織化それ自体と主体の発達とは同じではなく、組織化の主体への反映の仕方が示されていないとした。

そして労働の社会化論の基底として、主体内面における営為の独自性を捨象して、客観的経済的条件が直接に主体形成を規定するというマルクス主義に起因する人間観があるということを、戦後間もない時期に行われた主体性論争や他の論者による労働の社会化論に触れながら論じた。

（２）経営史学的接近の視角 主体の価値観や意識、心理などの要素を主体形成の契機として重視していく立場で、重富は論者として高橋正郎をとりあげた。

高橋正郎

農業経営学において高度な能力を持つ担い手を作り出して行くことが課題とし、同じような環境下での経営行動の差を知るため、中川敬一郎による「文化構造」の概念から引用しつつ、個人的な心理的条件にまで立ち入って説明を試みた。

なお、中川の言説は、主体を生む要因は経済過程の外部に求めるべきとし、主体的なものが特定の社会に一定の傾向を持って現れること、あるいは異なる価値体系についての理論を見いだそうとすることにおかれ、「文化構造」という人間の意識、価値観、社会心理などの特色を示す概念を用いざるを得ないとするものであった。

視角の特徴は、以下の３つに分けられた。

i) 経済的条件としての人間の内面的心理的条件から企業者の形成を説明しようとする点

ii) 経済的条件を経済機会としてとらえている点

iii) 農業分野において、企業者の経営行動は組織において初めて成立することから、特定の有能な個人（地域リーダー）を対象に限定して主体形成を考察しようとする点

そして高橋の視角の方法論の根底として、シュンペーターやニーチェの哲学とも関連し、実存主義に至ることを示した。

（３）重富はそれぞれの視角を評価した。労働の社会化論を基礎に置く視角は、層としての農民を対象にすえている点は評価するものの、内面的営為にまで立ち入った分析をせず、経済的条件の変化から直接的に主体の変容を導くために、経済的条件自体の持つ主体への作用（発達と発達阻害）が理論的に克服していない

ように思われるとし、経済的条件の主体への心理的条件と作用（内面的緊張）にまで立ち入るとき、労働の社会化論も生きていくであろうとした。

経営史学的接近の視角は、高橋が地域リーダーのみを経済発展の担い手として認識していること、特定の個人が地域リーダーになった過程が不明であること、そして現代の日本農業において、地域リーダーの対象限定と異なる価値体系についての理論化の2者が両立すること、の3つに対して重富は疑問を唱えたが、内面的心理的条件から企業者の形成を説明しようとする点に関して、特定の個人への対象限定を行わずに広範に内面的営為・作用を捉えることで、高橋の視角を乗り越えることができるのではないかとした。

### 3) 農民意識と経営管理能力育成

重富は現実の農民の意識状況がどのような目標に具現し、経営変革へのエネルギーを生み出していくのか、また、その目標に向けて経営を発展させ経営主体としての能力の形成へと、どのように主体をかりたてるのか、そのメカニズムの現代的特色を探ることを目的とした。

#### 方法

(1) 重富はある若い経営主体を例に挙げ、その主体が同地域の同様の経営形態の農家よりも労働時間が短いにもかかわらず経営管理能力が高い理由として、家庭生活や余暇の時間的ゆとりを志す強い欲求ないし生活観と経営での成功という欲求の両立を試みる際の、合理的な経営管理を志すエネルギーの表出の存在を述べた。

(2) 1の両立をめざしている者が一定層として存在していることを、同地域で同様の経営形態にある同年代の事例を対象としたアンケート調査結果を用いて示した。

(3) 既存の大量意識調査の結果を用いて、1で述べた2つの欲求の両立を試みる意識構造がこの年齢層の経営主体の現代的特色として捉えうるものであることを示した。また、余暇の時間的ゆとりは、労働意欲・経営管理・経営構想・学習をもたらす契機であることも、労働時間の短い人ほど余暇時間において「新聞を読む」など積極的な行動が「テレビ・ごろ寝」などの消極的な行動よりも多いこと、別の調査で余暇時間の長い人は余暇の意味を「知識や教養を得ること」とする傾向が「休養」あるいは「仕事を忘れる時間」とする傾向よりも高いという結果から論じた。

(4) 経営主体の能力形成に関わる客観的条件の影響を示した。すなわち経営主体の世代が、（高度経済成長期にほぼ一致する）学齢期の自己形成過程において、家庭生活・余暇といった価値観を得たものの、農業所得の増大と共に労働時間の

増大を招いた姿を目にしていること、かつ現在、悪化する経営条件の中でその価値観が危機にさらされているため、仕事・余暇の目標を達成するために自己鍛錬を強いられてきていることを述べた。

（５）合理的な経営管理と意識構造の相関を求め、粗収益等の経営管理に必要な事項の把握の度合いと、上述の意識構造との相関を調べ、比較的強い正の相関が有ることを示した。

なお、本稿で重富は、主体の持つ目標像に共通する性格と、主体をとりまく客観的経済的条件の特色を捉えたうえで、それらの間の矛盾がどのような能力形成の課題として内面的緊張を形作するのかを理解することから、能力形成メカニズムに共通するものを推論し、さらにその帰結として現象した世界からもそのメカニズムを傍証するという手続きを取った。

### ３．おわりに ― 今後求められる方向性 ―

「農業経営者能力形成過程に関する一考察-課題認識の展開を中心に-」は、営農上の関心事が二十代においては基礎技術の修得に、三十代においては経済目標・より高度な経済目標などであったことから、重富氏は経営内の地位変化を第一インパクト・社会経済的条件や経営構造の変化を第二インパクト・第二インパクトの準備性としてシエマの変化と基礎技術の修得をあげている。この論文では発達心理学、哲学の内容にも触れられており、今後も、主体形成論においては、人間の思考・行動を把握する上で、農業経営学・農業経済学に加え幅広い分野の知識が必要とされると思われる。

「農業における主体形成論の系譜」は、主体形成のメカニズムの理論の検討と理論に含意される人間像にふれており、主体形成の歴史的な流れが明らかにされている。しかし、この論文が書かれて以来15年近く経過しており、これ以後の系譜を明らかにする必要があるであろう。

「農民意識と経営管理能力育成」は、実際の経営変革において、農民の精神、意識が主体的条件としてどのように関わるのかを探ることを課題としている。ここでの結論は、重富氏も論のなかで述べたとおり、仮説の域を超えるものではない。仮説を越える方法論が必要とされるであろう。また、3つの大量調査アンケートの結果が用いられたが、労働時間の増加するに従い消極的な休息が増えるという結果には、疲労・年齢・性別の影響も考える必要があると思われる。

## 引用文献および参考文献

- 重富真一「農業における主体形成論の系譜」『農業経営研究』第22巻2号, 1984
- 重富真一「農民意識と経営管理能力育成」『農業経済研究』第57巻, 第1号, 1985
- 重富真一「農業経営者能力形成過程に関する一考察-課題認識の展開を中心に-」  
『農林業問題研究』第19巻, 2号, 1983
- 秋津元輝「農業経営学における行動論的志向の展開とその展望」『農林業問題研究』第99号, 1990
- 糸原義人『農業経営主体論』大明堂, 1992
- 稲本志良「農業における経営発展と経営行動」『農林業問題研究』, 第26号, 1971
- 大泉一貫「農業の生産主体形成と生産調整」『農業経済研究報告』, 第17号, 1979
- 大泉一貫「農業経営組織の構造と管理」『農業経済研究報告』第20号, 1985
- 大泉一貫「農業経営組織の構造と管理(続)」『農業経済研究報告』第21号, 1987
- 大泉一貫「経営の社会性と経営成長」『農業経済研究報告』第27号, 1994
- 大泉一貫「実践的農業経営研究の視点と手法」『農業経済研究報告』第28号, 1995
- 大泉一貫『農業経営の組織と管理』農林統計協会, 1989
- 大河内暁男『経営構想力』東京大学出版会, 1979
- 大原興太郎「若い担い手の意識と行動-異質なものととの共存による主体形成-」  
『農業経済研究』第65巻2号, 1993
- 木南章「養豚経営における定性要因の定量的分析」『農業経済研究』第58巻, 第4号, 1987
- 木村伸男・佐々木隆「農業経営者論」長憲次編『農業経営研究の課題と方向-日本農業の現段階における再検討-』, 1993
- 倉本器征「水田作経営の主体形成」『農業経営研究』第22巻3号,
- 後藤幸男他『経営学を学ぶ』有斐閣, 1971
- 酒井他「農家負債の分析」『東北農業経済研究』第21号, 1987
- 七戸長生『日本農業の経営問題』北海道大学図書刊行会, 1988
- ジャン・ピアジェ『知能の心理学』みすず書房, 1967
- 高橋正郎「農業経営研究方法に関する一省察-経営史学の方法と関連して-」『農業経済研究』第39巻, 第4号, 1964
- 田口三樹夫「農業経営者の思考と行動-転形期の農業経営者論-」『農業経営学講座5 農業経営管理論』地球社, 1980
- 天間征「経営者能力と普及問題」『農業経営研究』, 12号, 1969
- 中川敬一郎「企業者とその社会的環境」『経済往来』, 第12巻, 1960
- 根本他『新しい教育心理学の構図』協同出版, 1989

- 松木洋一「農業労働様式の分析方法について」『農業経営研究』第28号, 1977
- 美土路達雄編著『現代農民教育の基礎構造』北海道大学出版会, 1981
- 宮川他『現代農業者の意識像-リーダー的農業者・兼業農家意識調査結果-』（社）  
地域社会計画センター, 1983
- 山田定一『地域農業と農民教育』日本経済新聞社, 1980
- 横山淳人「『単なる業主』論再考-農業における主体形成論のユートピア-」『農業経営研究』第34巻1号, 1996
- 和田照男「現代の農業経営管理の基本課題」『農林統計叢書18新しい農業経営管理』農林統計協会, 1990